

うぐいすづか 鳶塚 ——芭蕉への夢——

漢詩と和歌は、古くから並び立つ代表的詩型です。中世になって和歌から連歌が派生、近世に入って俳諧が流行しました。俳句の聖人、松尾芭蕉（1644～1694）が“漂泊の詩人”として俳文紀行「奥の細道」を著わしたのは有名です。この芭蕉にかかわる句碑や塚が、一般にいわれる「芭蕉塚」です。

筑紫野市にある武藏寺にある「鳶塚」（うぐいすづか）は1889年（明治22）9月、地元の松尾霞山、平島杯二、井筒井水が発起人となって建立したものです。台石の上の高さ1.5mの自然石には、真中に大きく「芭翁之碑」とあり、その左右には二行に分けて「鳶の笠おとしたる椿哉」の句が刻まれています。1690年（元禄3）、芭翁の故郷、伊賀上野（現三重県）の百歳亭で詠まれた句とみられ、武藏寺の山号「椿花山」にちなんで撰句されたものでしょう。

松尾霞山は地元武藏の出身。本名は光昌で、のちに山弥と改名しました。号は霞山です。1897年（明治30）に死去しましたが、辞世の句「月落ちて野は志ら梅のもり哉」（原文）が



▲芭翁之碑（武藏寺境内）



▲鳶塚の横にある「紫藤の瀧」。手前は「菅公衣掛の岩」。

墓石に刻まれています。井筒井水は、同地の井筒又三郎（1897年死去）とみられますが、平島杯二是不詳です。武藏寺「地蔵会帳」の1890年（明治23）の記録には、平島作蔵の名が記載されています。

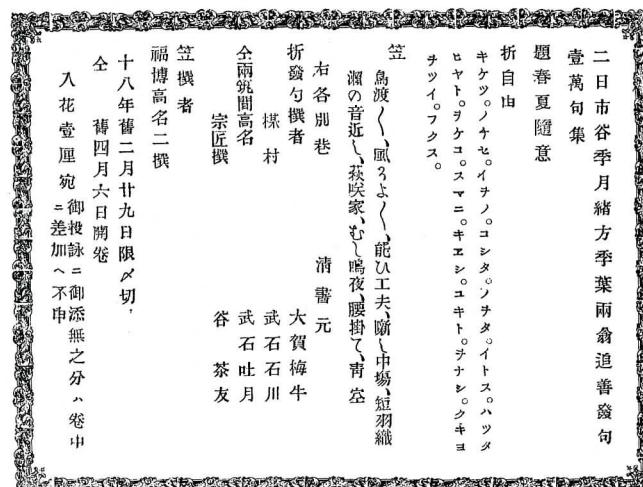
芭蕉は1694年（元禄7）の春、西国の人たちに自らの句境を伝えようと思い立ち、長崎まで足を伸ばすつもりで九州の旅に出ました。しかし、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の一句を残して大坂で病死、九州へ足を入れることはませんでした。

のちに、門弟の去来、野坡、怒風たちは、筑紫の地を「古翁往昔行脚の望み深く侍りし」

（「雪の葉」）ところとして、恩師に代わって悲願の地を目指し、相次いで訪れています。古風の域にとどまっていた筑紫俳壇は、こうした熱心な“芭蕉行脚”によって、急速に蕉風俳諧が広まっていきました。

芭蕉の高潔な人格と“言葉遊び”による俳諧の新風に対して、尊敬と慕情をつのらせた多くの俳人たちは、各地で供養の塚を建立しています。筑前では3回忌と17回忌の追善供養塔も建てられています。筑紫では太宰府天満宮の「夢塚」「梅香塚」、宝満山の「栗塚」があります。

〈参考〉川上茂治著『九州の芭蕉塚』



明治期には、芭蕉へ思いをはせる人々による句会が盛んに催されていました。

